

文字表記、書きことばの社会言語学

書きことばは、話しことばよりも保守的である。話しことばは、発音もファジー（あいまい）なところがある。話しことばは発されるとともに、きえていく。しかし、文字表記は「かたち」がはっきりとしている。その「かたち」がしっかりこのころ。文字表記は、多くの人に使用され、定着していくなかで、固定化される。書きことばには権威主義的な言語態度がむけられることが多く、その「正しさ」について厳格になる人がいる。しかし一方で、書きことばの改良をこころみる人もでてくる。あたらしい文字をためそうとする人もいる。つづりをわかりやすくしようとする人もいる。すでにある文字を改良して現在の文字表記にいくつか追加しようとする人もいる。文字表記は、音声言語を流通させるための土台になるため、さまざまな理想が語られ、よりよい「かたち」が追求される。

書きことばの保守性をうみだしたのは、印刷技術である。活版印刷がでてきたことによって、つづりの固定化、分かち書きのルールなどが確立した。

現在は、電子文字の時代であり、自動校正機能などでスペルのまちがいを訂正しやすくなっている。そして一方で、文字によるコミュニケーションでは、あえて規範をずらした表記も多用される。

文字表記、書きことばは機械化、近代化などの過程で、重大な関心事であった。それは同時に、識字層の拡大という社会課題とも通じていた。多くの人を読み書きすることができるように、ことばや表記を民主化するということも重要なテーマだったのである。その議論は、英語には英語なりの文脈があり、プロセスがあった。日本語には日本語なりの展開があった。今回は、日本語表記に関する議論に注目する。

日本語表記をめぐる議論—「古くて新しい」問題

社会言語学／日本語学の研究で知られる柴田武（しばた・たけし）は1965年に「国字論争の対立点」という文章を書いている（しばた1965）。日本語表記をめぐる議論が「国字問題」と呼ばれていた時代である。柴田は「前島密〔まえじま・ひそか〕が「漢字廃止之議」を将軍慶喜〔よしのぶ〕に奉ったのが1866年だから、それからもう一世紀になる」とのべている（同上:18）。柴田は、日本語表記をめぐる議論が「西欧化」「近代化」をきっかけにしたものだったことを指摘し、日本語表記についての改革が日清戦争や日露戦争のあとにどのような動きがあったかをつぎのように指摘している。

たとえば日清戦争（1894-5）のあとで、国語問題を処理する政府機関ができていた（1902）。いまの国語審議会の前身、国語調査委員会で、ここの調査方針の第一箇条に、

文字は音韻文字（フォノグラム）を採用スル事トシ、仮名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト
をかがげたことは、国字論争の歴史の上で重大な意味を持っている。政府は、漢字廃止を前提にして調査を始めているからである。また、このときから、政府は国字論争ではいつも進歩的な立場をとり、一部の民間がこれに反論するという形で論争が始まり、それが今日まで続いて来ている。…中略…

日露戦争（1904-5）後には、国字改革の民間団体が再興し、社会的な運動が始まる。…後略…（同上:19）

柴田は、当時設立された民間団体として、つぎのような例をあげている。

- ・1883年「かなのくわい」
- ・1885年「羅馬字会」
- ・1905年「ローマ字ひろめ会」

柴田は、時局の変化により「「欧化主義」に対する反動が起こった」ことにより、上のような団体の動きがおとろえたことを指摘している(同上)。そして、「明治維新以来の国字論」が「近代化が停止するときには影をひそめ、近代化が前進するときには姿をあらわす、という歴史をくり返している」と指摘している(同上:20)。

なお、現在も存在する団体として、つぎのようなものがある。

- ・カナモジカイ <http://www.kanamozi.org>
- ・日本のローマ字社 (Nippon-no-Rōmazi-Sya) <http://www.age.ne.jp/x/nrs/>
- ・日本ローマ字会 <http://www.roomazi.org>

言語政策へのまなざし

柴田は、社会言語学的に重要な論点である「ことばと人為」について、つぎのように指摘している。

言語が時とともに変わるということは、だれでも認めないわけにはいかない、明らかな事実である。ところが、言語が変わるのは、言語の主体である人間がその意志によって変えるからだということ、これについては、認めるわけにはいかないと言い張る人がある。言語が変わるのは、自然に変わるからであって、人為によって変わるのではないという考えの人である。国字論争の対立する、一つの理由は、言語変化をどう見るか、その言語観に違いがあるからだと思う(同上)。

柴田は、つぎのように具体例をあげて説明している。

近くは言文一致の運動と、その成功とを考えてみよ。それは、書きことばを話しことばに近づける人為的な努力ではなかったか。一つ一つの単語ならば、自分の半生のうちにも、体験したことがいくつもあると思う。わたしは小学校の教科書では「活動写真館」ということばで習ったが、高等学校へはいるまでに、意識して「映画館」へ変えたことを、いまでもはっきり覚えている。過去のことではない。現在、当用漢字表を作って漢字の範囲を制限しつつあること、これが人為でなくてなんであろう。それに、この行動に反対するということが、これも人為的な行動ではないか(同上:20-21)。

ことばについて保守的な態度をとる人は、ことばそのものをひじょうに重要視する。そのため、手をくわえることに反対する。一方で、言語改革を議論する人は、ことばを重要視するからこそ、ことばをかえようとする。ことばが社会を構成する重要な要素、基盤であることを自覚しているからこそ、社会をかえるために、ことばをかえようとするのである。

正書法をつくること、つくらないこと

日本語には、正書法がない。それは、日本語の表記法が複雑であり、くみあわせ次第で、いくとおりにも表記できる語がたくさんあるからである。たとえば、「あきかん」という語をどのように表記するか。「空き缶」「空缶」「あきカン」…など、きりがなほどの選択肢/バリエーションがある。このような実態について、たとえば今野真二(このの・しんじ)はつぎのように肯定している。

日本語には正書法がない。正書法がないということは選択肢があるということで、それを理解し、その「自由」の中で、あまり窮屈にならずに、日本語を書き、日本語を使っていけばいいのではないかと思う(このの 2013:186)。

これは、日本語の漢字に音読みと訓読みがあり、ひらがなとカタカナがあることによる結果である。結果として、正書法をつくることができないのである。そして、ある人はそれを「自由」だと評価し、またある人は未整備だと否定する。もっとも、送りがなの規則などの教育が徹底されたこともあり、以前と比較すれば、日本語の表記は安定したといえる。ただし、その「自由さ」は、現在ウェブを検索する際にも支障となっている面がある。日本語表記は、文字としての利便性がかなり制限された状態にあるといえるが、多くの日本語話者は、それをよしとしてきたのである。

文字と自由の問題

安田敏朗（やすだ・としあき）は『漢字廃止の思想史』という本で、日本語表記から漢字を廃止するという思想について、どのように主張されてきたか、どのように反対されてきたかをまとめている。そのなかで、結論的なまとめとして、つぎのようにのべている。

…漢字廃止をとる側も、そうでない側も、「ひとつの日本語」の存在をうたがうことがなかった、ということはいえる。その意味では、ナショナルなものへの信頼はそれぞれに確固としてもっていたということではあるだろう。問題はそれぞれが、それぞれの「ひとつ」を「ただひとつ」のものにしようとしていたところにあるのではないか。

…中略…

「ひとつの日本語」も「ただひとつの日本語」も、さらには「ひとつの表記」、「ただひとつの表記」のあり方もとめないこと、これが、この長い本のなかでいいたかったことなのかもしれない。多様であることが豊かであることだ、と単純にいいきることが困難になりつつある現在であるからこそ、あえて記しておきたい。自由につかおうニッポンゴ、というそれはそれでまた身も蓋もない主張になってしまうのであるが、通用しなければしないで、調整をくわえていくだけのことであろう。たとえば、第一章で示したあべ・やすしのいう「漢字弱者」は、その調整をもとめているわけであるから（やすだ2016:438-439）。

この安田の議論でも、「自由」がキーワードになっている。安田は、あべ・やすしの文献として『ことばのバリアフリー』を参照している（あべ2015）。ただ、「本人」としては、漢字の問題については、「漢字という障害」（あべ2012）と「日本語表記の再検討」（あべ2010）が代表作のつもりである。

たとえば、「漢字という障害」では、結論としてつぎの4つを提唱している。

- ・人名・地名などの固有名詞の「かながき」
- ・わかちがきの導入
- ・漢字をつかわない自由の保障
- ・文字情報センターの設立（あべ2012:153-159）

つまり、「自由」が大事であるとしても、注目すべきは、それが「だれの自由なのか」ということである。日本語を自由に読み書きしている人たちがいる一方で、そのように発信された情報へのアクセスが、おおきなかべになっている人たちがいる。だから、情報アクセスを保障するための「調整」をする必要がある。そして、さらに漢字をつかわない自由も保障する必要がある。問題は、この社会でどのような日本語が権威づけられているのかということである（あべ2004）。漢字をつかう日本語が規範として強く意識されているからこそ、日本語を書くことに不自由を感じている人たちがいる。

ダイグラフィア—ふたつの表記を共存させる

日本語表記に関する議論は、「ただひとつの表記」を追求するのではなく、たし算の思想を提唱するものがある（あべ2010）。その議論は、つい最近登場したものではない。たとえば、マーシャル・アンガーは1990年につぎのようにのべている。

たとえ、日本政府がなぜか突然急激な文字の改革を急いで進めようとしたとしても、現存する伝統的的文字で書かれた文書の数は莫大なものであるから、日本は一番改革が目立つ場合でもデフランシス（DeFrancis1984b）がダイグラフィア（digraphia）とよんだ二つの表記システム（この場合はローマ字と漢字仮名交じり文）の共存が長く続く、いやひょっとすると際限なく続く時代にはることになるであろう（アンガー1990:283）。

このダイグラフィア論は2017年に出版された『国際化時代の日本語を考える—二表記社会への展望』であらためて議論された（アンガーほか編2017）。この本の最終章で屋名池誠（やないけ・まこと）はつぎのようにのべている。

…従来のメイン・システムはメイン・システムとして温存したまま、一方、音韻レベル表記であり・言語との対応関係も明晰で・ノンネイティブにとっては学びやすく発信にも受信にも使いやすいという特性をもつローマ字専

用システムを、第二のメイン・システムに格上げ・活用して「二表記併用社会」を作ろうというのは、これから外国出身者とも共存してゆかなければならない日本社会にあっては、すぐれた提案である（やないけ2017:226）。

しかし、「漢字という障害」でのべたように、漢字を苦手とする人は「外国出身者」だけではない（あべ2012）。さまざまな人が、日本語の読み書きに困難がある。そして、外国出身者以外は、日本で生活してきたがゆえに、ローマ字はむしろむずかしいという問題がある。従来の表記にひとつ追加するだけでは、「共存」はむずかしいといえるだろう。「やさしい日本語」といっても複数のかたちが必要だと指摘したとおりである（あべ2013）。

墨字（すみじ）と点字の日本語

日本語には正書法がないというのは、正確ではない。墨字の日本語（漢字かなまじり文）には正書法がないというのが正確である。なぜなら、日本語点字には正書法があるからである。

これまで、日本語研究では、点字をとりあげることがまったくといっていいほどなかった。最近になって、点字と墨字の両方に注目しようという議論ができてきている（あべ2015b、なかの2015a、2015b、2017）。

日本語点字の特徴は、つぎのようなものである。

- ・漢字をつかわない
- ・ひらがなとカタカナを区別しない
- ・文節わかちがきをする
- ・助詞の「へ」「は」を「え」「わ」とし、長音を「ー」とする

そのため、「きのう学校へ行った」という墨字の文章は、日本語点字では「きのー がっこーえ いった」となる。

あべ（2018）で説明したように、点字は紙だけでなく、電子データとしても流通している。点字データは、点字ディスプレイで読むことができる。パソコンにソフトをダウンロードすれば、パソコンの画面に点字データを「かな」で表示させることもできる。その文章を合成音声で読み上げさせることもできる。このような点字データは、漢字が苦手な日本語話者にとっては役にたつかも知れない。しかし、点字データについては点字使用者か、支援者にしか知られていない。点字データを見える化してみせることも、漢字をつかわない日本語を見える化するという意味でも、あるいは潜在的なニーズをさぐるという意味でも、必要なことであるだろう。

まとめ

柴田武は、「言語に加える人為にしても、ことばと文字とでは容易さに格段の差がある。文字はことばに比べて、人為が加えやすいと思う」とのべている（しばた1965:22）。近現代における世界各国の言語政策を見れば、それはあきらかであるといえる。たとえば、柴田は「トルコ共和国でも、アラビア文字からローマ字への文字改革は完全に成功した」ことを例にあげている（同上）。大胆な言語政策が実施されれば、文字表記はかわる。そのときどきの必要に応じて、文字表記を改善することはできる。しかし、そのような表記改革は、めったに実施されない。一度定着した文字表記をかえることはかなり困難である。

英語でも、発音に即したつづりにしようという運動があった（やまぐち2009、ホロビン2017）。しかし、発音に地域差があり、使用されている地域も広範囲であるため、表記を改革することはかなり困難である。文字が情報インフラをまわしている現代であるからこそ、表記改革はむずかしくなったといえるかもしれない。

その意味で、1997年に部分的な表記改革を実施したドイツ語は、タイミングがよかったのかもしれない。

現在、日本では「やさしい日本語」に関する議論がさかんである。2016年に制定された障害者差別解消法も、情報のバリアフリーをもとめている。そのような状況のなかで、日本語表記に関する議論をあらためてふりかえる必要があるだろう。

参考文献

- あべ・やすし 2004 「漢字という権威」 『社会言語学』 4号、43-56
- あべ・やすし 2010 「日本語表記の再検討—情報アクセス権／ユニバーサルデザインの視点から」 『社会言語学』 10号、19-38
- あべ・やすし 2012 「漢字という障害」 ましこ・ひでのり編 『ことば／権力／差別 [新装版] —言語権からみた情報弱者の解放』 三元社、131-163 (初出は2002年)
- あべ・やすし 2013 「情報保障と「やさしい日本語」」 庵功雄 (いおり・いさお) ほか編 『「やさしい日本語」は何を目指すか』 ココ出版、279-298
- あべ・やすし 2015a 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』 生活書院
- あべ・やすし 2015b 「漢字のバリアフリーにむけて」 『ことばと文字』 4号、97-105
- あべ・やすし 2018 「ことばのバリアフリーと〈やさしい日本語〉」 『学習院女子大学主催シンポジウム〈やさしい日本語〉と多文化共生 予稿集』 103-108 <http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/abe2018a.html>
- アンガー、J. マーシャル 1990 「漢字とアルファベットの読み書き能力」 梅棹忠夫 (うめさお・ただお) / 小川了 (おがわ・りょう) 編 『ことばの比較文明学』 福武書店、263-292
- アンガー、J. マーシャルほか編 2017 『国際化時代の日本語を考える—二表記社会への展望』 くるしお出版
- 梅棹忠夫 1990 「日本語表記革命」 『月刊日本語』 3月号、10-15
- 茅島篤 (かやしま・あつし) 編 2012 『日本語表記の新天地—漢字の未来・ローマ字の可能性』 くるしお出版
- 木村護郎クリストフ (きむら・ごろう くりすとふ) 2017 「言語における「自然」と「人為」—説明用語から分析対象への転換」 かどや・ひでのり / ましこ・ひでのり編 『行動する社会言語学—ことば／権力／差別2』 三元社、47-66
- 今野真二 (こんの・しんじ) 2013 『正書法のない日本語』 岩波書店
- 柴田武 (しばた・たけし) 1965 「国字論争の対立点」 『言語生活』 2月号、18-26
- 角知行 (すみ・ともゆき) 2012 『識字神話をよみとく』 明石書店
- 寺澤盾 (てらさわ・じゅん) 2008 『英語の歴史』 中公新書
- なかの・まき 2015a 『日本語点字のかなづかいの歴史的研究』 三元社
- なかの・まき 2015b 「日本語点字の表記論—漢字をつかわない日本語文字としての日本語点字」 『ことばと文字』 4号、106-112
- なかの・まき 2017 「点字と墨字のわかちがきについて」 『ことばと文字』 7号、129-136
- 野村剛史 (のむら・たかし) 2019 『日本語「標準形」の歴史—話し言葉・書き言葉・表記』 講談社
- 野村雅昭 (のむら・まさあき) 2008 『新版 漢字の未来』 三元社 (初出は1988年)
- ホロビン、サイモン (堀田隆一訳) 2017 『スペリングの英語史』 早川書房
- ましこ・ひでのり 2003 『増補新版 イデオロギーとしての「日本」』 三元社
- 安田敏朗 (やすだ・としあき) 2016 『漢字廃止の思想史』 平凡社
- 屋名池誠 (やないけ・まこと) 2017 「表記論から「二表記併用社会」の必要性を考える」 アンガー、J. マーシャルほか編 『国際化時代の日本語を考える』 くるしお出版、201-234
- 山口美知代 (やまぐち・みちよ) 2009 『英語の改良を夢みたイギリス人たち—綴り字改革運動史1834-1975』 開拓社

学生のコメント

4限の授業でちょうど手話についてやりました。両親は耳がきこえることが多く、ホームサインが用いられるというのを聞きました。ろう学校では、子どもたちがホームサインをもちより、ピジン化し、それが受け継がれて洗練されてゆき、クレオール化するという内容でした。…後略…

【あべのコメント：ニカラグラ手話が誕生した経緯のことでしょうね。スティーブン・ピンカーの『言語本能』（日本語訳の題は『言語を生みだす本能』）でも紹介されています。】

…アメリカ英語の手話とイギリス英語の手話があるように、英語の手話は日本語手話よりもより言語としての機能を持っているように考えられる。…後略…

【あべのコメント：いや、「アメリカ英語の手話」「イギリス英語の手話」「日本語手話」というのは、すべて誤解です。アメリカ手話は、アメリカ手話の起源があり、イギリス手話には、イギリス手話の起源がある。おなじく、日本手話も起源がある。ろう学校、遺伝性の聴覚障害者が多い島や村など、ろう者が集団を形成したときに手話が誕生したのです。手話は、音声言語を手であらわしているものではないのです。日本手話の文法というものが聴者に理解されてこなかったから、聴者は日本手話の単語を日本語の語順にあわせて「ならべる」ものが手話なんだと誤解してきた。それを便宜として「日本語対应手話」と呼んできただけで、それはむしろ「手指日本語」と呼んだほうが適切だと指摘されるようになってきているのです。】

小学校1年か2年の時に、手話を使いながら歌を歌ったことがある。歌の題名を忘れてしまったが、今でも少し止まりながらも手話とともに歌うことができる。また、高校2年の時に部活動で、手話をしながら「世界で一つだけの花」を歌った。…後略…

【あべのコメント：残念ながら、そういうのは聴者の自己満足でしかないものです。スマップのメンバーも、あれは「ふりつけ」だと位置づけていて、「手話」だとは主張していませんでした。うたいながら、ふりつけ的に手話の単語をならべているだけのもので、それ以上のものではありません。ろう者のなかには、そういった「手話コーラス」をつよく否定している人もいます。】

…教育課程で日本手話を必修課目にして、教育の場から”日本手話”を当たり前にする環境が作れるといいなと思いました。

【あべのコメント：関連情報として、「日本手話を「言語科目」として開講している大学の情報」というウェブページがあります (http://user.keio.ac.jp/~matsuoka/jsl_univ.htm)。わたしが2000年に社会福祉学の「手話」という授業を受けたときは、手話通訳者の人が講師を担当していて、手話の単語だけを学んでいくというものでした。当時は日本手話に文法があるという発想が普及していなかったのです。たまにろう者がゲストできていました。】

スウェーデンは日本よりろう者の割合が高いのですが、ろう学校はかなり少ないらしいです。…後略…

【あべのコメント：人工内耳手術をしてしまう割合が高いということです。人工内耳手術でろう者の文化を抹殺しようとしているわけです。善意で。人工内耳手術については、反対しているろう者がかなり多いのですが、多くの場合、聞こえる親のもとに生まれるので、親は手術をえらんでしまう。】

亀井先生の授業で、ギャローデット大学のお話を聞きました。その中で、印象的だったのが、図書館の構造です。吹きぬきになっていて、1階と2階にいる人たちが手話で”会話”するというのです。講義やカフェテリア、売店などすれちがう人々がASLで会話していて、電話をのぞいて、英語を話すことはないといひます。…中略…実家の近所に、ろう者のご夫婦が住んでいます。奥さんがお風呂で心不全をおこして、搬送されたのですがそのまま息を引きとられました。旦那さんが、もし自分が耳が聞こえたなら、もっと早く異変に気付けたかもしれない。もっと早く救急車が呼べていたら（その時は近所の手話がわかる人の家に行って救急車を呼んでもらった）助かったかもしれない、と言っていました。ろう者の人権保護の観点から考えれば、こうしたシーンで音声言語にたよらない通報や緊急車両の要請ができるシステムがあればいいと思いました。

【あべのコメント：とっさに食べものがのどにつまって窒息してもがいているという状況でも声はだせないですね、声がだせない場合の緊急通報については、システムが整備されつつある状況です。総務省消防庁のウェブサイトに「Net119緊急通報システム」というページがあります (<https://www.fdma.go.jp/mission/prepare/transmission/net119.html>)。導入状況も把握できます。愛知県でも、導入できている自治体と準備中の自治体があります。】

Twitterで補聴器をつけて自転車をこいでいたらイヤホンだと警察官にまちがえられて注意され、そして耳が悪いから付けていると説明しても、イヤホンと誤解するから外せと言われたという出来事を目にした。聞こえにくくなると、音にきづけなかつたりしてより危険になってしまうのに。…後略…

近年、ウェブサイトの多言語化はよく問題にされているが、盲目の人や障害のある人に配慮したウェブサイトはあるのでしょうか？

【あべのコメント：盲目の人という語は当事者はあまり使用してなくて、視覚障害者、見えない人・見えにくい人、盲人などの呼称がより適切です。／「ウェブ・アクセシビリティ」という語で議論されてきました。画像には代替テキストをつけること、クリックしやすいようにリンクテキストは小さくしすぎないことなど、いろんな指針があります。わたしも「ことばのバリアフリーと〈やさしい日本語〉」という文章でかんたんに解説しています。 <http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/abe2018a.html>
るう者の場合だと、いろんな情報が手話による動画として提供されていれば、アクセスしやすくなります。】

手話で学べる学校が少ないという事実を知って、外国人学校の少なさを思い出しました。特に日本ではフィリピン人学校がひとつしかないそうです。学校での教育によってアイデンティティを育てることができると思うので、これから増えていくといいなと思いました。

【あべのコメント：日本にいるフィリピン人は女性が多く、日本人男性と結婚して、子育てをしている場合が多いです。そうすると、「外国人学校」に通学させようということになかなかならないという背景もあるでしょう。】

…バイト先に耳の聴こえないお客様が来ることがあります。私がする商品の説明は、私の口の動きを見て理解しているように思います。でも、一緒に来た家族と話すときは手話を使っていて（私はこの時、そのお客様が耳の聴こえない方だと気づくのですが）、聴覚口話法は、手話が分からない人が言うことを理解するには役立ちますが、手話が分かる人同士だったら聴覚口話法を使わないのだなと思いました。…後略…